令和７年１２月５日
体育・保健体育、健康、安全ＷＧ（第４回）
資料１－１

幼児教育から小学校低学年への系統性について

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループ（第４回）
吉田伊津美（東京学芸大学）

2025/12/05

幼児教育WGにおける議論の状況

（現行の要領における幼小のつながり）

これまでの議論と子供を取り巻く現代社会の課題

3～5歳児

1．幼児の遊びや生活に関する現状と課題

- 意図的に用意しなければ、幼児の発達に必要な、様々な人やものと直接的・具体的に関わる体験を十分に確保することが困難になっている。
- 一部の幼児教育施設においては、幼児の興味・関心ではなく、ＳＮＳ等からの偏った情報やそれらに影響を受けた一部の保護者のニーズを優先するなどし、幼児の発達にふさわしくない教育活動が行われているとの指摘がある。

2．幼小中高（幼児教育施設（幼稚園、保育所、認定こども園）から小学校・中学校・高等学校等）を通じた教育の改善・充実

- 「論点整理」においては、「全ての幼児児童生徒に育むべき資質・能力育成の具体化・深化と並行して、一人一人の『好き』（興味・関心）を育み、『得意』を伸ばしながら、それらを原動力として学び全体への動機付けを図っていく取組と、当事者意識を持って、自分の意見を形成し、多様な他者と対話や合意を図る取組を同時に進め、これらが有機的に関わり合い高まっていく教育課程に変革していく必要がある」とされている。
- この実現を幼小中高を通じて目指す中で、幼児教育においては、小・中・高における教育課程の変革を支える基盤的役割を果たすため、「**言葉を用いて思考を深めていく指導**」や「**他者と関わり協同する力の育成**」が求められている。

(1) 言葉にまつわる課題

・考えを自分なりの言葉で表現する体験は積み重ねているが、遊びや生活をよりよくしたいと思い、更に考えようとして言葉を用いる体験を一層充実する必要があるとの指摘。

・小学校以上の学習の中では、教科で扱う言葉が現実の事象や経験と結び付いていないために、知識が形式的・断片的になりやすく、深い理解につながらない場合があるとの指摘。

(2) 他者との関わりに関する課題

・幼児教育施設に入園するまで、家族以外の人と関わる経験が少ない場合が多いとの指摘。

・SNSや生成AIの負の側面の影響もあり社会分断の可能性等も指摘される中で、自分とは行動・態度、考え方、成育環境などが異なる者とは関わろうとせず、他者との交流が同質な集団内に偏る傾向への懸念。

3．現代的課題への対応

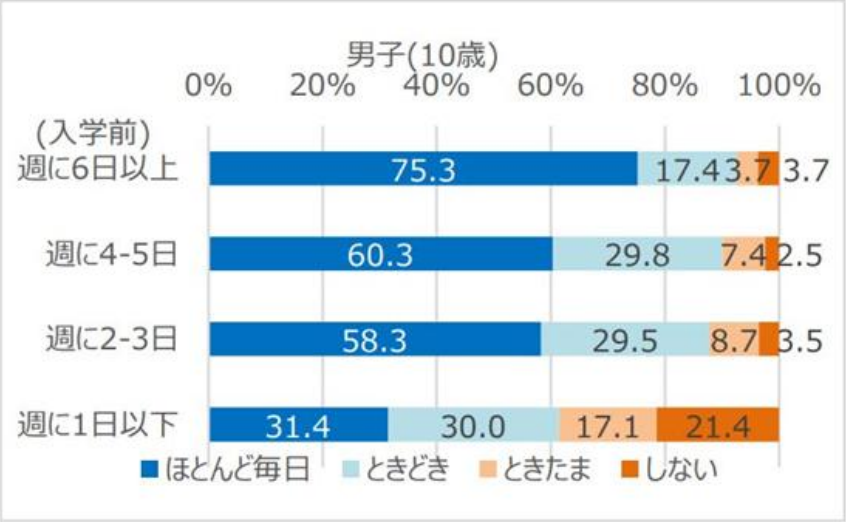
- 全身を使って体を動かすことや多様な動きを経験することは実践されているが、“幼児の自発的な活動としての遊びの中で”体験することが重要である点や、そうした体験を通して身体感覚を養うことなどについては、一部の園では十分に理解されていない面があり、“先生からの一方的な指示等により体を動かすための活動”になっている場合もあるとの指摘がある。
- 令和6年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査によると、体力合計点は小学校男子は前年度からほぼ横ばい、小学校女子は引き続き低下、１週間の総運動時間（体育の授業を除く）が60分未満の割合は小学校男子・女子ともにほぼ横ばいであった。

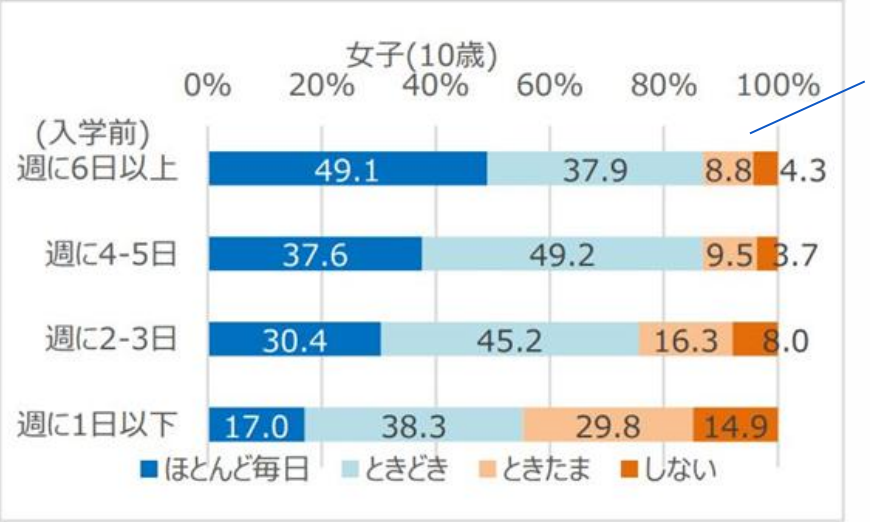
幼児期の運動遊びと運動能力等との相関

幼児期に外遊びをよくしていた小学生は、日常的に運動し、体力も高い。

幼児期の運動習慣・体力は、高学年児童の運動習慣・体力と関連

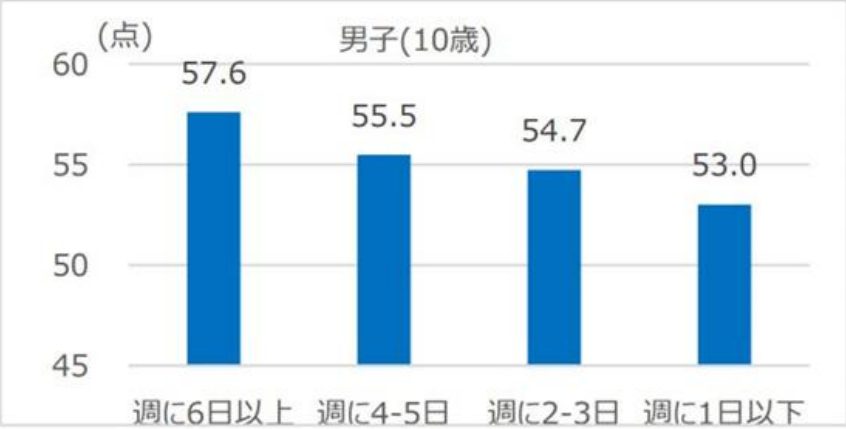
入学前の外遊びの実施状況別に見た運動・スポーツ実施状況（10歳）





入学前(幼児期)に外遊びをよくしていた子どもは、小学生(10歳)でも日常的によく運動している

入学前の外遊びの実施状況別に見た新体力テスト合計点（10歳）



入学前(幼児期)に外遊びをよくしていた子どもは、小学生(10歳)の体力が高い

令和元年度スポーツ庁「体力・運動能力調査」

内容の改善・充実の方向性（案）

3～5歳児

◆幼児教育は、幼児期の特性を踏まえ、**環境を通して行うもの**であることを基本としており、幼児の**自発的な活動としての遊び**を通して資質・能力が育成されるよう、全ての幼児教育施設において、遊びの中で様々な人やものと直接的・具体的に関わる体験が一層充実されることを改善・充実の根幹とすべきではないか。

◆その上で、小・中・高で育成を目指す資質・能力の基礎を培う観点から、「学びに向かう力、人間性等」のみならず、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」を一体的に育む改善・充実をどのように図っていくか、別途、具体的に検討すべきではないか。

◆特に、論点整理等で指摘されたことを踏まえ、以下の④～⑥について、下記に示すとおり改善・充実を図ってはどうか。

④言葉を用いて思考を深めていく指導の充実

補足イメージ①

- 遊びの中での直接的・具体的な体験を通して、実感を伴って言葉を身に付けていくことが、言葉を通じた概念の習得や深い意味理解につながることから、個別の単語の習得に終始するのではなく、幼児が言葉を手掛かりに自分を取り巻く世界（モノ・ヒト・コト）を理解しようとすることの重要性を再確認すべきではないか。
- 思考力の芽生えが培われるよう、自分の表したい・伝えたい考えを言葉で表現する中で、先生の援助（言葉を添える、代弁する、視覚的資料等を合わせる等）を受けながら、更に考えようとして言葉を用いる指導の充実を図ってはどうか。
- その際、技能的な伸長ではなく、遊びや生活をより楽しく面白くするために、言葉を用いて自分の考えがまとまったり深まったりすることへの喜びや満足感等を十分味わうことに重点を置くべきではないか。

⑤他者と関わり協同する力の育成に向けた指導の充実

補足イメージ②

- 多くの他の幼児や先生とともに過ごす、園という身近な社会において、自分とは異なる他者と関わり、他者とともに目標を形成し、その目標に向かって協同していく力の育成を目指し、指導の充実を図ってはどうか。
- その際、自分とは異なる他者への寛容を基に、思いや考えを伝え合い、葛藤やつまづきをも体験しながら、自他を尊重し、幼児なりのルールや納得解を形成するなどして、園内の身近な社会の一員として遊びや生活を作っていくことを通じて、当事者意識と社会参画意識の芽生えが育まれることが重要ではないか。

⑥“様々な遊びの中で”多様な動きを行う指導の充実

補足イメージ③

- “幼児の自発的な活動としての遊びの中で”多様な動きを体験することの重要性と、そうした体験を通して身体感覚を養うことを踏まえた指導の充実を図ってはどうか。
- 幼児期からの運動習慣の形成を図るため、領域「健康」等における指導に加え、文部科学省・スポーツ庁、自治体等が行う幼児の運動促進のための取組を活用するなどして、１日の生活全体の中で、幼児が自発的に体を動かして遊ぶ機会を充実することが重要ではないか。

3～5歳児

⑥“様々な遊びの中で”多様な動きを行う指導の充実のイメージ（案）

補足イメージ③

○ これまでも、幼児が様々な遊びの中で全身を使って体を動かすことや多様な動きを経験することができるよう実践されてきたが、“幼児の自発的な活動としての遊びの中で”体験することの重要性や、そうした体験を通して身体感覚を養うことについて、あらためて確認する必要がある。

○ また、「幼児期運動指針」では、動きの獲得の方向性として、「動きの多様化」（年齢とともに獲得する動きが増大すること）と「動きの洗練化」（基本的な動きの運動の仕方（動作様式）がうまくなっていくこと）があることが示されるとともに、量（時間）的な目安として、「幼稚園、保育所などに限らず、家庭や地域での活動も含めた一日の生活全体の身体活動を合わせて、幼児が様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすことが望ましい」とされている。

○ これらを踏まえ、主に領域「健康」において、“幼児の自発的な活動としての遊びの中で”多様な動きを体験することの重要性と、そうした体験を通して身体感覚を養うことを踏まえた指導の充実を図ってはどうか。

また、文部科学省・スポーツ庁、自治体等が行う幼児の運動促進のための取組を活用するなどして、１日の生活全体の中で、幼児が自発的に体を動かして遊ぶ機会を充実することが重要ではないか。

○ これにより、小学校体育科における「運動遊び」等の指導との円滑な接続が図られるとともに、生涯に渡る運動習慣の形成につながることが期待される。

（実践例のイメージ）

・Ａ児たちは、自分の好きな〇〇戦隊の変身ポーズをしたり、筒を武器に見立てて掛け声をかけ合ったりしています。

・先生は、「Ａさんのポーズは格好いいね。向こうの広い所でもう1回見せて。」と認めの言葉を掛けながら戸外へ遊びの場を移していきます。

・Ａ児たちは、互いに友達が付いて来ているかを気にしながら園庭を駆け回ります。一人が「あっちに怪獣がいる！」と築山を登ると他の幼児も登り、慎重に足を運びながら岩場を下っていきます。園庭の固定遊具一つ一つを身をかわしながらジグザグに走り抜け、また築山を登り、岩場から下ってきます。日頃は機敏な動きがあまり見られず慎重なＢ児も、〇〇戦隊になりきってみんなと一緒に走ったり登ったりしています。

・先生も「怪獣はどこに行ったかな？」などと幼児のイメージを捉えながら言葉を掛けます。次第に走るコースが固まってきて、築山の岩場から「トーッ！」と声を上げながら飛び下りることを繰り返し楽しみました。

（実践例のイメージ）

・絵本からイメージがわいた幼児たちは、遊戯室に平均台やマットなどを組み合わせた探検コースを作り始めました。

・マットの上に置いた大型箱積木をワニの背中、平均台を橋ということにして、バランスをとりながら、落ちないように渡ります。段ボールで作ったトンネルの中を這って通った後は、蜘蛛の巣に見立てた高さの違うゴムに触れないように、そっと足を上げてまたいだりくぐったりします。

・次第に、幼児はすいすいと平均台を渡るようになったので、先生が探検隊の仲間の一員として「石ころがあるってことね。」と平均台に玉入れの玉をおいてイメージを伝えると、幼児は玉をまたいで平均台を渡ります。

・そのうちに「こんなの簡単！もっと難しくしようよ。この岩、おっきいぞ！」と箱積木を平均台の上に乗せました。そして、その積木をまたいでも平均台から落ちないように渡ることに挑戦し始めました。

（取組のイメージ）

例えば、

・「幼児期運動指針」について、文部科学省・スポーツ庁、こども家庭庁が連携して、一層の周知啓発を図る。

・自治体等において、幼児教育施設と連携・協力し、保護者等を対象に、幼児期運動指針等を活用した幼児期に運動遊びを行うことの重要性の啓発のための取組を実施。

・自治体等において、幼児教育施設の遊戯室や園庭を活用し、幼児を対象に運動遊びの取組を実施。

・幼稚園教諭、保育士、保育教諭が、自治体等が行う幼児の運動促進のための取組等に研修として参加。

など

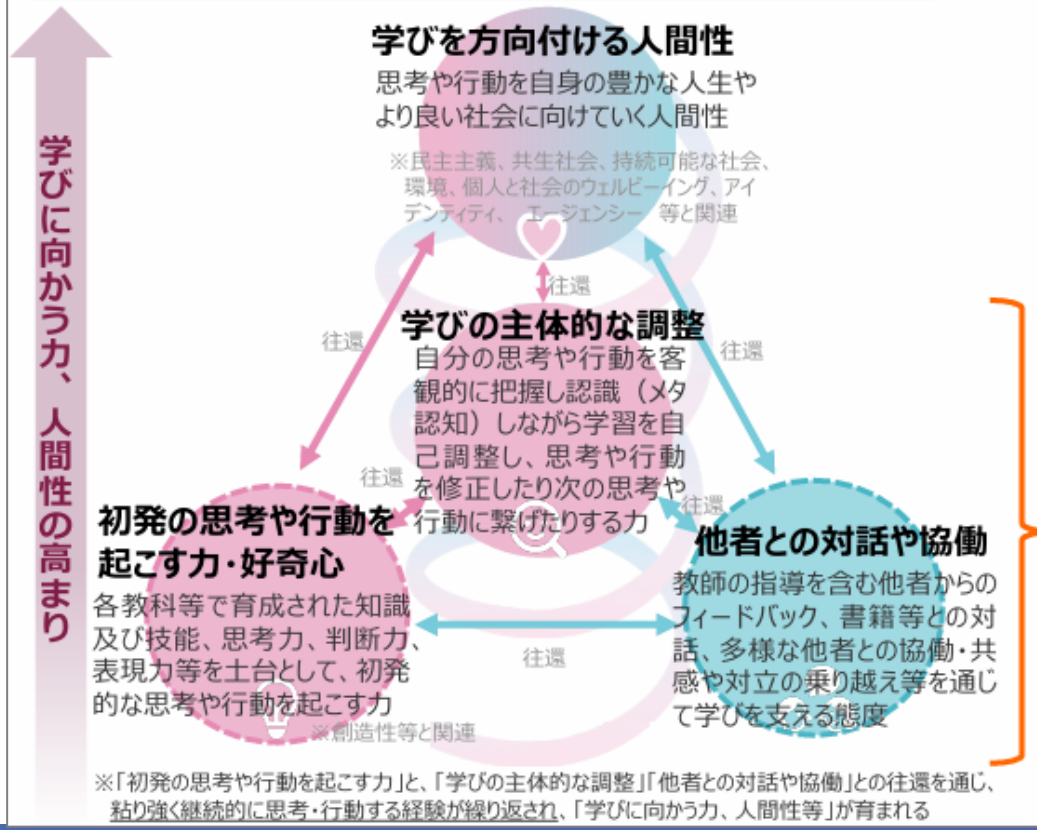
学びに向かう力、人間性等の今後の整理イメージ（素案）

- 「論点整理」においては、
  - ・「学びに向かう力、人間性等」を基本的な概念としては存置しつつ、主要な要素や要素間の関係を構造化して分かりやすく提示すべき、
  - ・その際、各種調査から我が国の子供たちの課題と考えられる「まず考えてみること、行動してみること」等を「学びに向かう力、人間性等」の要素と位置付け、下図イメージのとおり、４つの要素の関係として整理する方向で検討すべきとされている。

【今後の整理イメージ】

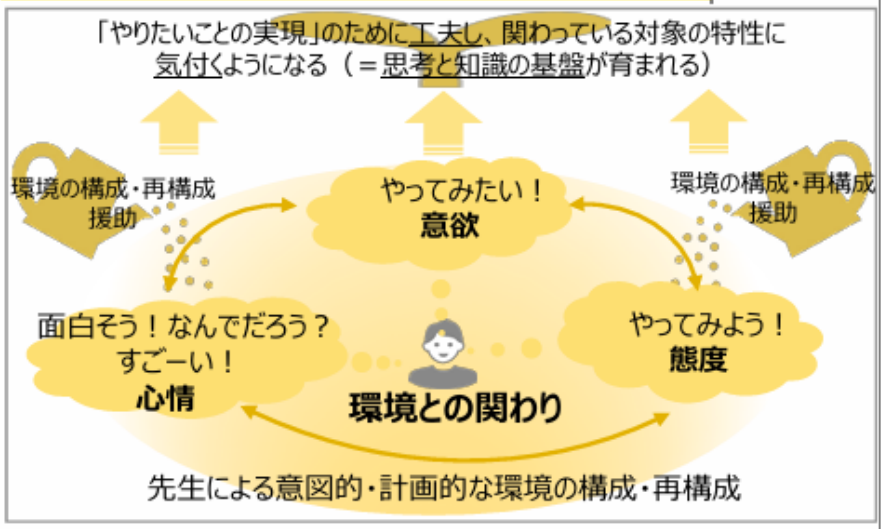
論点整理p18参照

変化が激しい不確実な社会の中で、学びを通じて自分の人生を舵取りし、社会の中で多様な他者とともに生きる力を育む



※「初発の思考や行動を起こす力」と、「学びの主体的な調整」「他者との対話や協働」との往還を通じ、粘り強く継続的に思考・行動する経験が繰り返され、「学びに向かう力、人間性等」が育まれる

- 環境を通して行う教育を基本とする幼児教育の特質を踏まえ、特に「学びの主体的な調整」や「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」などの要素について、幼児教育としてどのように捉えられるか。また、その際、従前より幼児教育が重視してきた「心情、意欲、態度」（下図参照）が育つ中で、「学びに向かう力、人間性等」の育成をどのように捉えられるか。



◆下部の各要素については、乳幼児の発達を踏まえ、幼児教育としての説明を、幼児期の後半をイメージして検討

初発の思考や行動を起こす力・好奇心　自分に自信をもち、様々な事物や現象、他者の姿などに興味や関心をもったり憧れを抱いたりして、自ら積極的に関わろうとする力

他者との対話や協働　先生や友達などの他者に親しみ、信頼し、他者との関わりを通して多様な感情を体験したり互いの考えに触れたり葛藤を乗り越えたりしながら、目標を共有して協同しようとする力

学び(遊び)の主体的な調整　遊びながら、実現したいことを願い、どのようにしたらいいか見通し、試したり工夫したりして振り返り、難しいことが生じても粘り強く取り組んで、更なる試行錯誤や工夫に繋げる力

幼児期運動指針（抜粋）①

4　幼児期の運動の在り方

（1）運動の発達の特性と動きの獲得の考え方

幼児期は、生涯にわたって必要な多くの運動の基となる多様な動きを幅広く獲得する非常に大切な時期である。動きの獲得には、「動きの多様化」と「動きの洗練化」の二つの方向性がある。

「動きの多様化」とは、年齢とともに獲得する動きが増大することである。幼児期において獲得しておきたい基本的な動きには、立つ、座る、寝ころぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がるなどの「体のバランスをとる動き」、歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這う、よける、すべるなどの「体を移動する動き」、持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引くなどの「用具などを操作する動き」が挙げられる。通常、これらは、体を動かす遊びや生活経験などを通して、易しい動きから難しい動きへ、一つの動きから類似した動きへと、多様な動きを獲得していくことになる。

「動きの洗練化」とは、年齢とともに基本的な動きの運動の仕方（動作様式）がうまくなっていくことである。幼児期の初期（3歳から4歳ごろ）では、動きに「力み」や「ぎこちなさ」が見られるが、適切な運動経験を積むことによって、年齢とともに無駄な動きや過剰な動きが減少して動きが滑らかになり、目的に合った合理的な動きができるようになる。

次に、目安として幼児期における一般的な運動の発達の特性と経験しておきたい遊び(動き）の例について示す。なお、幼児の発達は、必ずしも一様ではないため、一人一人の発達の実情をとらえることに留意する必要がある。（略）

（2）運動の行い方

幼児期は、生涯にわたる運動全般の基本的な動きを身に付けやすく、体を動かす遊びを通して、動きが多様に獲得されるとともに、動きを繰り返し実施することによって動きの洗練化も図られていく。また、意欲をもって積極的に周囲の環境に関わることで、心と体が相互に密接に関連し合いながら、社会性の発達や認知的な発達が促され、総合的に発達していく時期である。

そのため、幼児期における運動については、適切に構成された環境の下で、幼児が自発的に取り組む様々な遊びを中心に体を動かすことを通して、生涯にわたって心身ともに健康的に生きるための基盤を培うことが必要である。

また、遊びとしての運動は、大人が一方的に幼児にさせるのではなく、幼児が自分たちの興味や関心に基づいて進んで行うことが大切であるため、幼児が自分たちで考え工夫し挑戦できるような指導が求められる。なお、幼児にとって体を動かすことは遊びが中心となるが、散歩や手伝いなど生活の中での様々な動きを含めてとらえておくことが大切である。

これらを総合的に踏まえると、幼稚園、保育所などに限らず、家庭や地域での活動も含めた一日の生活全体の身体活動を合わせて、幼児が様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすことが望ましい。また、その推進に当たっては、次の3点が重要である。

スポーツ庁＞政策＞子供の体力向上＞幼児期運動指針
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop03/list/1396909.htm

運動の発達の特性

動きの獲得の二つの方向性
〇「動きの多様化」
　色々な動きができるようになる
〇「動きの洗練化」
　動きが上手になる

👉**多様な動き**

ガイドブック

普及用パンフレット

幼児期の運動に関する指導参考資料
第１集

第２集

幼児期運動指針（抜粋）②

①多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること

幼児期は運動機能が急速に発達し、体の基本的な動きを身に付けやすい時期であることから、多様な運動刺激を与えて、体内に様々な神経回路を複雑に張り巡らせていくことが大切である。それらが発達することにより、普段の生活で必要な動きをはじめ、とっさの時に身を守る動きや将来的にスポーツに結び付く動きなど多様な動きを身に付けやすくすることができる。そのためには、幼児が自発的に様々な遊びを体験し、幅広い動きを獲得できるようにする必要がある。幼児にとっての遊びは、特定のスポーツ(運動）のみを続けるよりも、動きの多様性があり、運動を調整する能力を身に付けやすくなる。幼児期には体を動かす遊びなどを通して多様な動きを十分経験しておくことが大切である。

体を動かす遊びには、先に挙げたように多様な動きが含まれる。例えば、鬼遊びをすると、「歩く、走る、くぐる、よける」などの動きを、夢中になって遊んでいるうちに総合的に経験することになる。そのため、幼児期には様々な遊びを楽しく行うことで、結果的に多様な動きを経験し、それらを獲得することが期待される。

多様な動き

②楽しく体を動かす時間を確保すること

多様な動きの獲得のためには、量（時間）的な保障も大切である。一般的に幼児は、興味をもった遊びに熱中して取り組むが、他の遊びにも興味をもち、遊びを次々に変えていく場合も多い。そのため、ある程度の時間を確保すると、その中で様々な遊びを行うので、結果として多様な動きを経験し、それらを獲得することになる。

文部科学省調査では、外遊びの時間が多い幼児ほど体力が高い傾向にあるが、4割を超える幼児の外遊びをする時間が一日1時間（60分）未満であることから、多くの幼児が体を動かす実現可能な時間として「毎日、合計60分以上」を目安として示すこととした。幼児にとって、幼稚園や保育所などでの保育がない日でも体を動かすことが必要であることから、保育者だけでなく保護者も共に体を動かす時間の確保が望まれる。

なお、幼児が体を動かす時間は、環境や天候などの影響を受けることから、屋内も含め一日の生活において、体を動かす合計の時間として設定した。

毎日、合計60分以上

③発達の特性に応じた遊びを提供すること

幼児に体を動かす遊びを提供するに当たっては、発達の特性に応じて行うことが大切である。幼児は、一般的に、その時期に発達していく身体の諸機能をいっぱいに使って動こうとする。そのため、発達の特性に応じた遊びをすることは、その機能を無理なく十分に使うことによってさらに発達が促進され、自然に動きを獲得することができ、けがの予防にもつながるものである。また、幼児の身体諸機能を十分に動かし活動意欲を満足させることは、幼児の有能感を育むことにもなり、体を使った遊びに意欲的に取り組むことにも結び付く。

したがって、幼児期の運動は、体に過剰な負担が生じることのない遊びを中心に展開される必要がある。発達の特性に応じた遊びを提供することは、自発的に体を動かして遊ぶ幼児を育成することになり、結果として無理なく基本的な動きを身に付けることになる。

発達に応じた遊び

これらを踏まえ、幼児の興味や関心、意欲など運動に取り組んでいく過程を大切にしながら、幼児期に早急な結果を求めるのではなく、小学校以降の運動や生涯にわたってスポーツを楽しむための基盤を育成することを目指すことが重要である。

小学校以降の運動や生涯にわたってスポーツを楽しむための基盤を育成

〇現行幼稚園教育要領 領域「健康」における主な改訂点

・「幼児期運動指針」（文部科学省,2012）などを踏まえ、**多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすることを「内容の取扱い」に新たに示した。**

第２章 ねらい及び内容　健康　「内容の取扱い」

(2) 様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。その際、**多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること。**

・これまで指導計画の作成に当たっての留意事項に示されていた**安全に関する記述**を、安全に関する指導の重要性の観点等から「内容の取扱い」(6)に位置付けた。

第２章 ねらい及び内容　健康　「内容の取扱い」

(６)安全に関する指導に当たっては、情緒の安定を図り、遊びを通して**安全についての構えを身に付け**、危険な場所や事物などが分かり安全についての理解を深めるようにすること。(後略)

※**安全についての構えを身に付ける**とは、幼児が自分で状況に応じて機敏に体を動かし、危険を回避するようになることであり、安全な方法で行動をとろうとするようになることである(幼稚園教育要領解説p.155)。

＝わかって(理解・判断)、できる(回避可能)

動きの獲得＝体の動きを調整すること
→場に応じた動きができる（遊び、生活）

《子どもの安全能力》
1）**身体的な面**：体の大きさ、**運動能力**など
2）**知的な面**：理解力、判断の正確さなど
3）**社会的な面**：道徳性、社会的規範など
4）**精神(行動)的な面**：注意散漫、衝動的など

幼児教育と低学年の動き・遊びのつながり

■：動き（**多様な動き、基本的な動き**/十分に体を動かす）
■：**遊び（運動遊び）**
■：楽しさ、心地よさ、気持ちよさ
■：意欲、進んで、しようとする

幼稚園教育要領等（３歳児以上）	小学校学習指導要領（第１学年及び第２学年）
健　康	**体　育**
ねらい	**目　標**
(2)自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする 遊びを通しての指導を中心（幼児教育の基本）	(1)各種の運動遊びの楽しさに触れ、(中略)、基本的な動きを身に付けるようにする (2)各種の運動遊びの行い方を工夫する(後略) (3)各種の運動遊びに進んで取り組み、(中略)、意欲的に運動をする態度を養う
内　容	内　容
(2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む	A 体つくりの運動遊び (1) 次の運動遊びの楽しさに触れ、その行い方を知るとともに、体を動かす心地よさを味わったり、基本的な動きを身に付けたりすること ア 体ほぐしの運動遊びでは、手軽な運動遊びを行い、(後略) イ 多様な動きをつくる運動遊びでは、体のバランスをとる動き、体を移動する動き、用具を操作する動き、力試しの動きをすること (2) 体をほぐしたり多様な動きをつくったりする遊び方を工夫するとともに、(後略) (3)運動遊びに進んで取り組み、(後略) B 器械・器具を使っての運動遊び/　C 走・跳の運動遊び/　D 水遊び　/　E ゲーム/　F 表現リズム遊び
内容の取扱い	
(1)…特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること (2)…多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること	

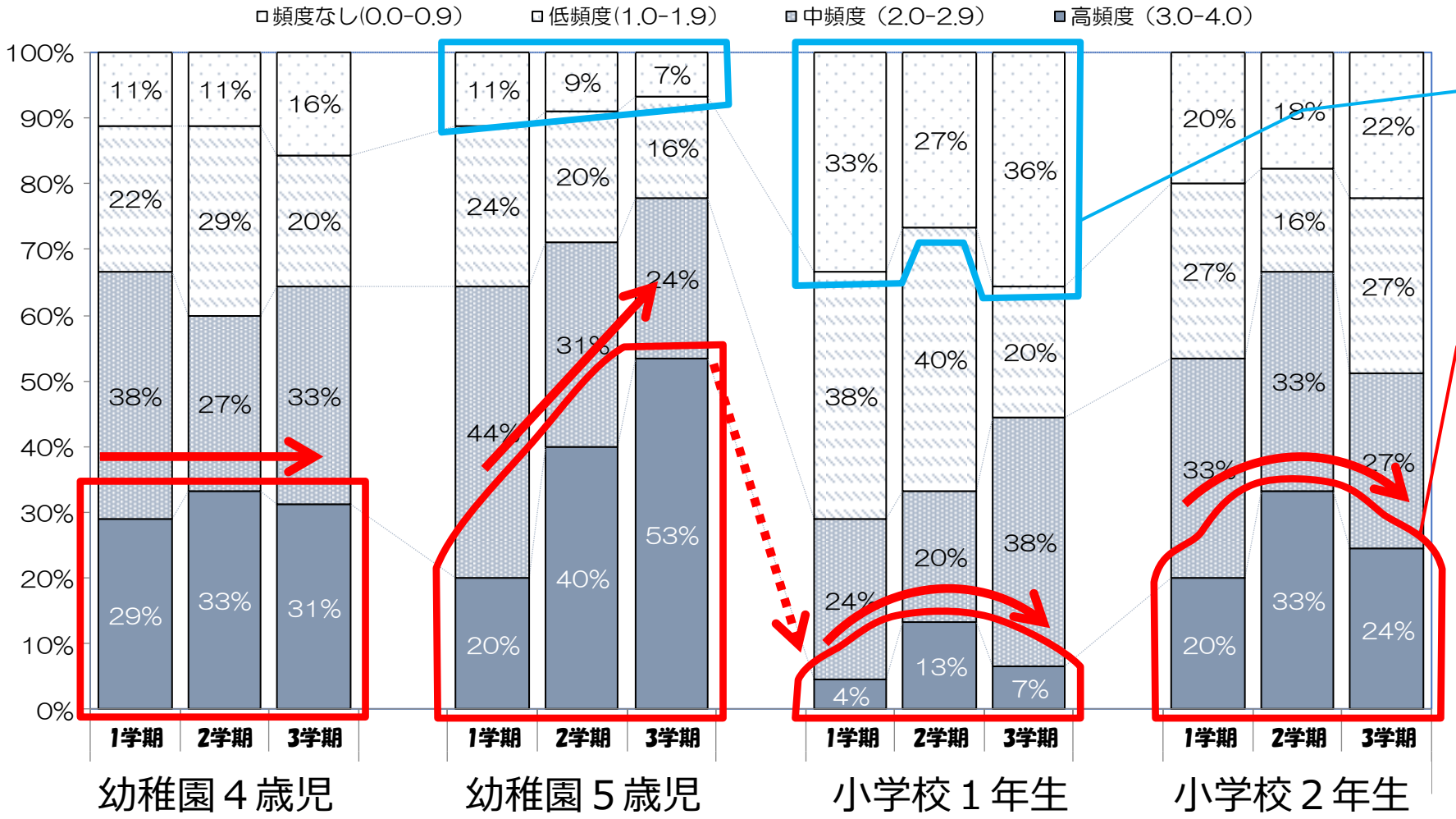
※３歳児以上「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」のねらい及び内容は同一

「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領」(平成29年告示)より作成

低学年の運動遊びについて

成果と課題

頻度の高い動きの割合～学年間の比較



頻度なし
まったく見られない
ほとんど見られない動き

高頻度
ほとんど毎日(回)見られた動き
たびたび見られた

対象　公立小学校1校1学年2学年各3クラス
幼稚園1園4・5歳児各2クラス（併設）
の担任教諭計19名
時期　各学期末×3学期×2年間
方法　45種の基礎的運動パターンのチェックリストにより頻度を5段階で評価
・(幼)教育課程内の運動遊びでみられた運動パターンを評定時1週間程度、
(小)1学期間を通し体育の授業全体でみられた運動パターンを評定

吉田伊津美（2016）幼稚園の運動遊びおよび小学校低学年体育で観察される 基礎的運動パターン　発育発達研究 70,48-54

低学年の体育における実践事例

目的：**小学校低学年の体育において遊びとしての運動を行うことの効果**を検証すること

方法：千葉市Ａ小学校第1学年3クラス96名

■**授業内容：多様な動きをつくる運動遊び(5時間)**

■調査項目：質問紙（遊び要素、運動遊びの好嫌）
：動きの観察評価、動きの種類と総数(抽出児６名)

■**授業実践：テーマ＝忍者修行（修行、音楽を流すなど）**

①学習の道筋→**自己決定の要素を十分に保障**

②**動きの多様化**を図る場の設定　（様々な場、行い方に幅）

③**動きの洗練化**を図るバリエーションの提示　（動き方のバリエーション）

教育・保育に役立つ「遊び」のとらえ方

①指導理念、②指導実践、二つの基準を満たした捉え方

遊びとは、自己決定と有能さの認知を追求するために内発的に動機づけられた状態

①指導理念の立場から（教育における遊びの重要性）

1)**自己決定的に行動すること**は、自分らしく行動することであり、自分らしさを育み、個性を育て、自立した人間を育てること

2)**有能さを追求すること**は、個人が潜在的にもって生まれてくる様々な可能性を実現させ、自己の能力を向上させること

①自分が今もっている**全力を発揮**するような行動

②自分の能力をさらに高めようとする**挑戦的な行動**

②指導実践の立場から（遊びとしての運動指導の基本方針）

遊びの指導において教師・保育者は、**子どもの動機で行っているかを見ぬく目が必要**（しかし、心の動きの理解は困難、容易ではない）

👉**行動における子どもの自己決定が遊び要素**
何を行うか、きまりはどうするか、どのように行うかなど

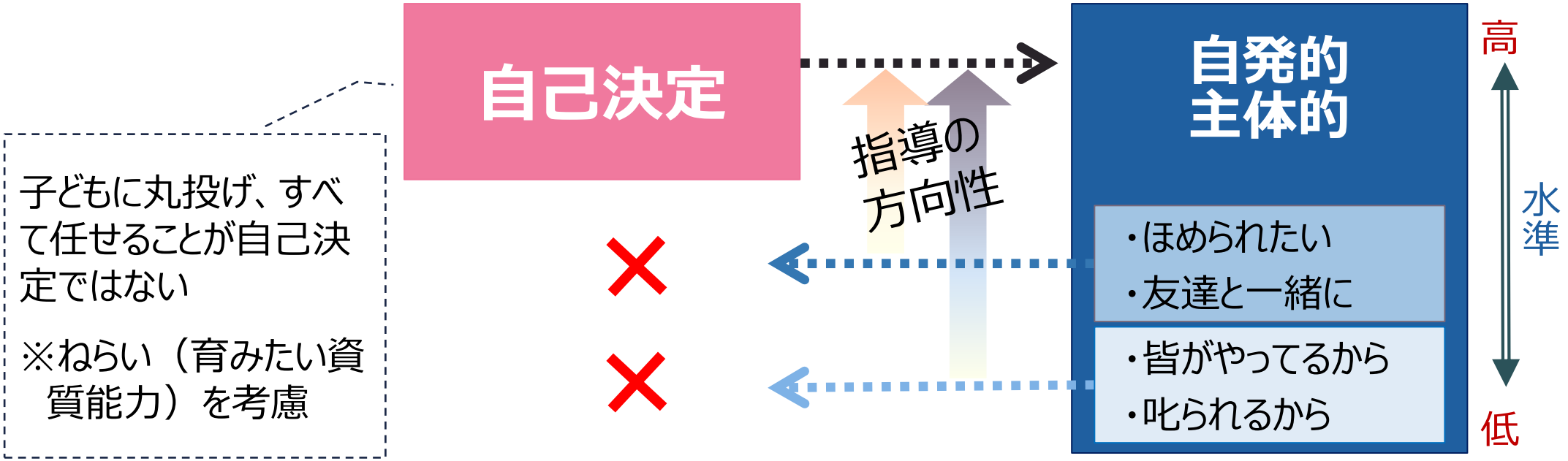
参考：杉原隆（2014）遊びとしての運動の重要性 杉原隆・河邉貴子(編著) 幼児期における運動発達おける運動遊びの指導 ミネルヴァ書房 Pp.31-44

遊び(内発的動機づけ)と自発性・主体的について

自己決定と有能さの認知

自発的＝自分から進んでするさま (広辞苑,第６版)

主体的＝自分の意志・判断に基づいて行動するさま(デジタル大辞泉,小学館)



参考：杉原隆（2014）遊びとしての運動の重要性 杉原隆・河邉貴子(編著) 幼児期における運動発達おける運動遊びの指導 ミネルヴァ書房 Pp.31-44

- **鬼遊び(導入)** **日常的な遊びへの汎用性の高い氷鬼**を行った。友達を助ける動きを工夫することで、周囲の状況に気を配ることや、体を移動する動きの最中に体のバランスを崩したり戻したりする**動きを意図的に経験**させた。
- **忍者修行(主運動)** 教師の演示した動きを反復練習したり、いくつかの場を時間ごとにローテーションするような手立てでは行わず、**子供たちが場や遊び方を自己決定できるように**した。
- 途中と最後に認知学習の場面を設けることで、集中力の持続を図ると共に、**思考面の力を養った**。

授業の流れ→

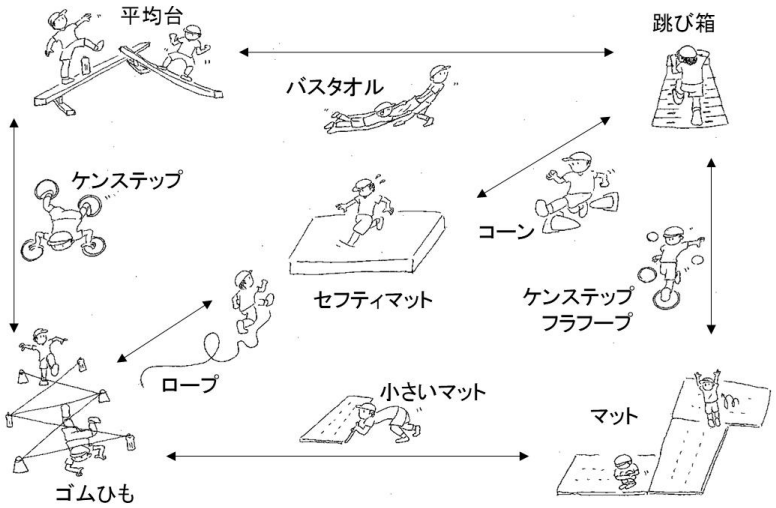
0 → 10	10 → 20	20 → 25	25 → 35	35 → 45分
氷鬼	忍者修行	認知学習 課題の確認	忍者修行	認知学習 振り返り
助け方を工夫	自由にやってみる	クールダウン 他者意識	課題を意識して ステップアップ	次時へ つなげる

低学年の体育における実践事例

- ねらいとした**動きを引き出す**であろう**用具を選定**し、児童の動きが停滞しないように**動線を考慮**した。
- 各場における運動遊びの**行い方を自由にする**ことで戸惑う児童もいたが、教師が運動遊びを楽しむ**モデル**となり、一緒に遊びながら動き方を**例示**したり、様々な児童の動き方を**称賛**したりすることで、**動きの多様化**を図った。
- 各場での児童の動き方を撮影し、掲示資料にも反映させた。

渡る、すれ違う、またぐ、乗り移る

くぐる、またぐ、這う、跳び越す



よじ登る、跳び乗る、跳び降りる

回る、寝ころぶ、転がる、起きる

［忍術カードの実際］
大きくの術、小さくの術、忍び足の術、素早くの術、動物歩きの術、巻き戻しの術、分身の術(友達と一緒に動く)、影の術(友達の真似をする)、など…

力強く、遠くに
(力量的調整)

速く
(時間的調整)

タイミング・方向を合わせる
(時間・空間的調整)

- 遊び方が飽和してきた段階で**動き方のバリエーション**を示す「忍術カード」を提示、児童は各場において、自分が行いたい忍術を選んで挑戦。
- 慣れてきた児童には、２つ以上の忍術を組み合わせる**運動組み合わせ**への挑戦を促した。

２つ以上の動きの組み合わせ
（例：ける＋走る＝ドリブル）

《結果》

◆運動遊びへの好嫌

学習前、運動に対して否定的な態度を示していた児童(9.0%)が、
5時間の学習後には好意的に変容した

◆動きの質的変容

学習前後で３種の動き全ての得点が有意に向上し、
動きの質的変容が認められた

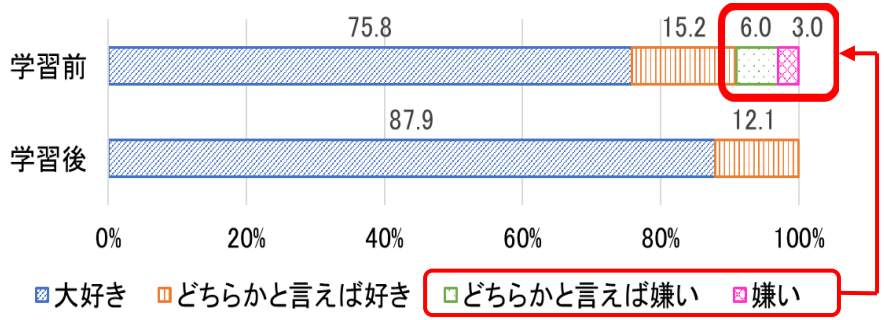


図1.学習前後の運動に対する態度（好き嫌い）

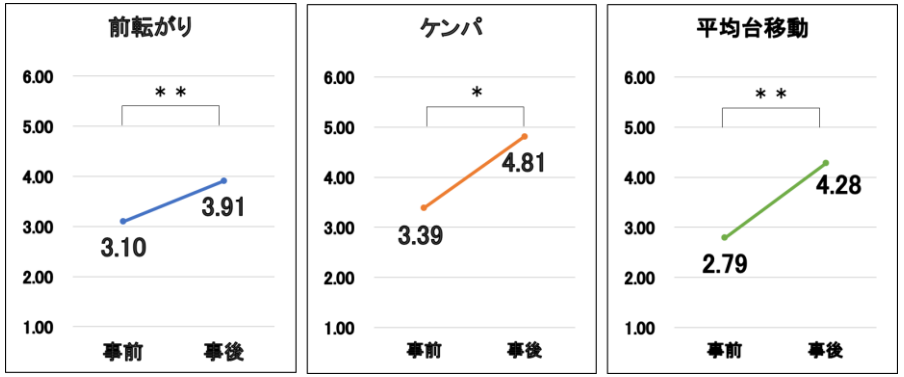


図2.学習前後の動作得点の変化

《考察》

小学校低学年の体育において、遊びとしての運動を学習することにより、

◆体育授業に否定的な態度を示す児童がいなくなった
→**運動の楽しさや喜びを味わうことができた**〔体育科の目標〕

◆多様な動きを経験し、**動きの洗練化がみられた**
→様々な体の基本的な動きを培うことができた〔体育科「体つくり運動＊」の内容〕
＊平成20年学習指導要領による実践

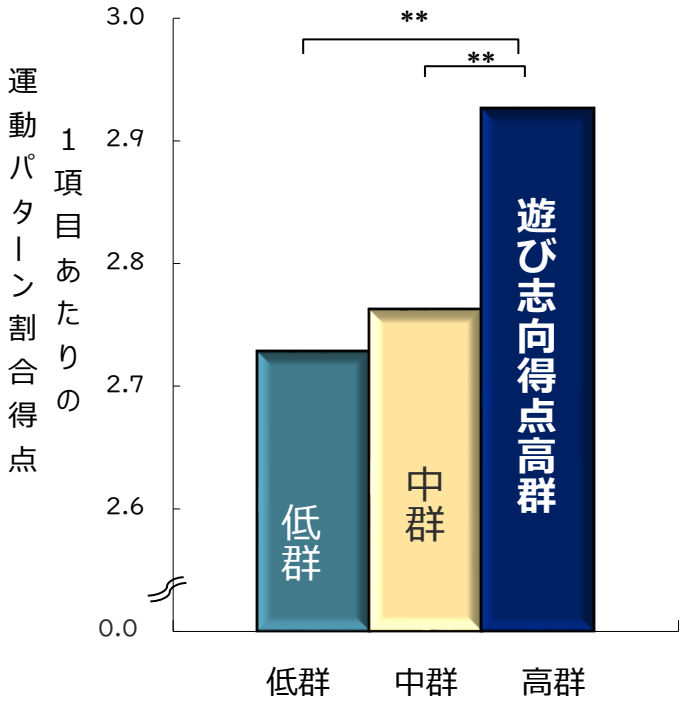
➡低学年における「遊びとしての運動」は、体育の目標がより実現しやすい有効な学習活動である

遊びとは、**自己決定**と有能さの認知を追求するために内発的に動機づけられた状態

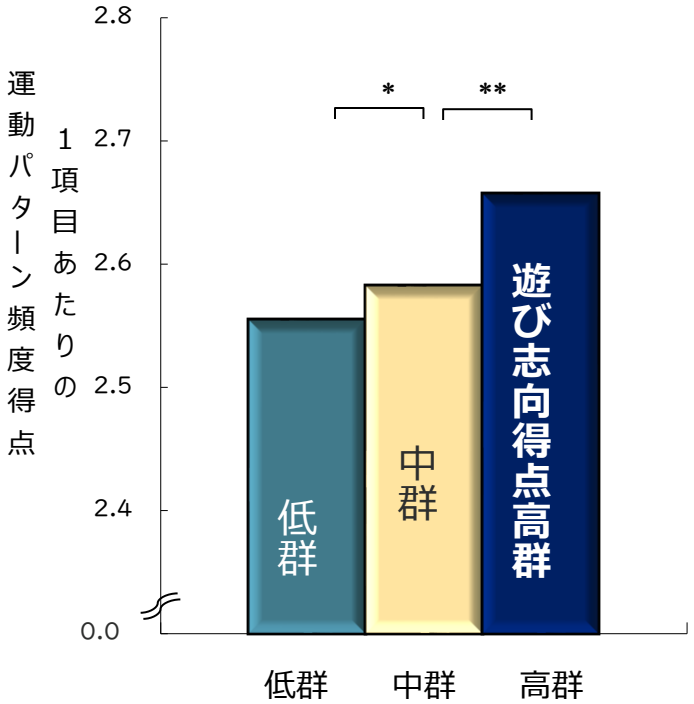
遊び志向と多様な動き・運動能力との関係

遊び志向（子どもの自己決定）得点：**高群**(子ども中心)・**中群**(半々)・**低群**(指導者主導)
①内容、②やり方、③ルール、④目標について指導者主導か子ども中心に行うかを尋ね得点化

クラスの子どもに見られる割合

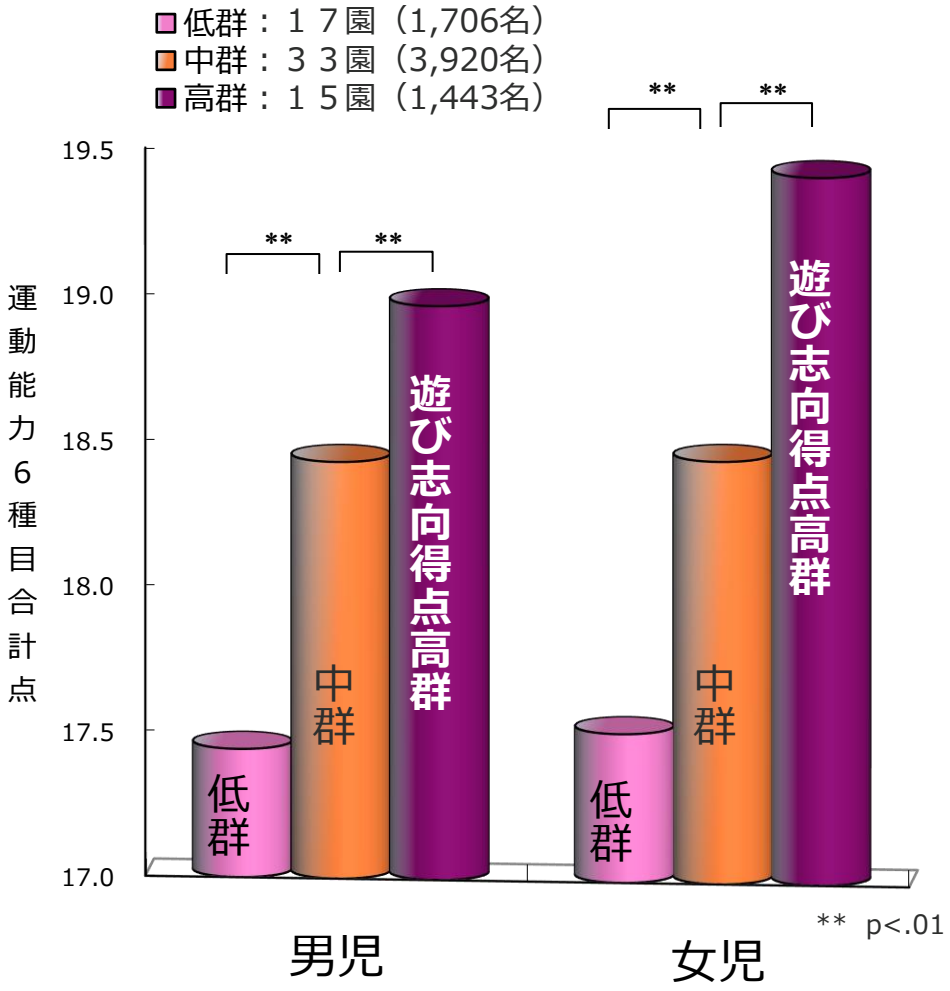


クラスの子どもが行う頻度



** p<.01 * p<.05

遊び志向×運動能力得点



** p<.01

杉原隆・吉田伊津美・森司朗・中本浩揮・筒井清次郎・鈴木康弘・近藤充夫（2011）幼児の運動能力と基礎的運動パターンとの関係 体育の科学 61，455-461

杉原隆・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・近藤充夫（2010）幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係 体育の科学 60，342-343

小学校学習指導要領(体育科の目標)

(1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに，基本的な動きや技能を身に付けるようにする

体育〔第１学年及び第２学年〕 目標

(1)各種の運動遊びの楽しさに触れ，（中略），**基本的な動きを身に付けるようにする**

(2)各種の運動遊びの行い方を工夫する(後略)

(3)各種の運動遊びに進んで取り組み，（中略），意欲的に運動をする態度を養う

体育〔第３学年及び第４学年〕 目標

(1) 各種の運動の楽しさや喜びに触れ，（中略），**基本的な動きや技能**を身に付けるようにする

体育〔第５学年及び第６学年〕 目標

(1)各種の運動の楽しさや喜びを味わい，（中略），各種の運動の特性に応じた**基本的な技能**及び健康で安全な生活を営むための技能を身に付けるようにする

基本的な動きや技能を身に付ける

１・２学年＝基本的な**動き**

３・４学年＝基本的な**動きや技能**

５・６学年＝基本的な　　**技能**

基本的な動きを身に付けるようにするとは，

・運動種目として成立する以前の基本的な動き

・運動遊びの楽しさに触れることを大切にしながら身に付けることを重視

〔国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料〕----------

「単元の評価規準」を作成する際のポイント(p.41)

〇「技能」については，文末を「～できる」として，評価規準を作成する。

「技能」の評価(規準)は「～できる」だが、基本的な動きが「できない」とは…？

事例１　マットを使った運動遊び（第２学年）

（１）知識・**技能**

単元の評価規準	児童の具体的な姿の例及び評価方法の例（p.54）	「十分満足できる姿」の設定例（p.55）
②マットに背中や腹などをつけていろいろな方向に転がって遊ぶことができる。	・前転がり，後ろ転がり，だるま転がり，丸太転がりなどいろいろな転がり方を試し，遊んでいる。（観察・ICT）	・いろいろな転がり方を**連続して**行うことができる。（何度も繰り返しできる）

・技能においては，連続してできる，滑らかにできる，安定してできるなど，よりよくできる姿で見取ることが想定される。

まとめ（私見）

- 要領/指針※上では小学校体育科との円滑な接続：多様な動き、運動遊び
  （小学校体育科における「運動遊び」等の指導との円滑な接続）

  ※３歳児以上「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」のねらい及び内容は同一

- 低学年の体育は、「運動遊び」であるにも関わらず、遊びとしての運動ではないのでは？
  （幼児教育においても一部に課題）
  ➡遊びとしての教育的意義を踏まえ、遊びとしての運動の実践が必要（効果的な学習）

- 基本的な「動き」と「技能」との区別がついていない？
  ➡わかりやすい要領・解説

教育の特徴（幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議（第1回）（2010）　配付資料３より）

	幼稚園	小学校
教育のねらい・目標	**方向目標**（「～味わう」「感じる」等の方向づけを重視）	**到達目標**（「～できるようにする」といった目標への到達度を重視）
教育課程	**経験カリキュラム**（一人一人の生活や経験を重視）	**教科カリキュラム**（学習の体系を重視）
教育の方法等	**個人、友達、小集団　「遊び」を通じた総合的な指導** **教師が環境を通じて幼児の活動を方向づける**	**学級・学年** **教科等の目標・内容に沿って選択された教材によって教育が展開**